

岩手医科大学歯学会第10回総会抄録

日時：昭和59年12月1日（土）午前8時55分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1 近年の岩手県および我国における歯科医師数の増加とその地域格差

○田沢光正, 宮沢正人, 稲葉大輔, 飯島洋一
片山 剛

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

近年の歯科医師急増傾向のなかにあつて、歯科医師の都市集中現象がどの程度解消されつつあるのかを、全国レベルおよび岩手県レベルについて検討した。

全国レベルの分析には、昭和40年から56年までの医療施設調査（厚生省）を資料として用い、地域別（大都市、人口30万以上の市、20万以上、10万以上、5万以上、5万未満の市および町村）に、各年の病院、一般診療所、歯科診療所に従事する歯科医師数を求め、それらを国勢調査による地域別人口で除し、人口10万対歯科医師数を求めた。岩手県については、県衛生年報（岩手県環境保健部）による保健所管内別歯科医師数および人口を用いた。

全国の地域別人口10万対歯科医師数は、昭和40年から56年に至るまで大都市と他の地域では大きな差が認められ、特に5万未満の市および町村との格差はきわめて大きい。昭和40年と56年の人口10万対歯科医師数は、大都市（40年：70.5人、56年：101.7人）、30万以上（36.8, 71.2）、20万以上（38.5, 57.5）、10万以上（40.5, 54.6）、5万以上（38.1, 48.8）、5万未満の市および町村（27.5, 32.0）の順であつた。すべての地域ともに増加が認められるが、地域間の格差は年々拡大し、都市集中傾向がきわだつてきていることがうかがえる。

岩手県全体の人口10万対歯科医師数は、近年大幅に増加し、全国の値との差も急速に縮小しつつある。しかし保健所管内別にみると盛岡保健所管内の歯科医師が特異的に激増し、このことが県全体の数値を引き上げている。盛岡保健所管内を除外した岩手県の10万対歯科医師数は昭和38年：16人、昭和56年：26人と増加傾向は云すものの、盛岡保健所管内との格差は拡大する傾向が認められる。

以上のように最近の歯科医師増加傾向のなかにあつ

て、我国および岩手県に認められる地域的な偏在は、いまだ解消する様子はなく、むしろ拡大する傾向を示している。

演題2 歯肉毛細血管内皮細胞の細胞骨格の分布

○会田則夫, 藤村 朗, 伊藤一三, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

細胞骨格は、細胞質に存在する線維状の構造物で、細胞外形を支持し核や細胞小器官を一定の位置に保持している。また、細胞運動、分泌、物質輸送など種々の機能に関与していると報告されている。血管内皮細胞では、Shasby (1982) らによつて microfilaments (MF) と透過性の関係が示された。今回、我々は3ヶ月齢雄性ブルーデンハムスター（5匹）の下顎臼歯部頬側歯肉の歯肉溝上皮 (SE) 側および外縁上皮 (OE) 側毛細血管内皮細胞の MF 分布密度を比較観察した。実験は、通法に従つて固定、脱灰、包埋し、超薄切片を透過型電子顕微鏡で撮影した。7万5千倍に拡大した電顕写真上に無作為に 1cm^2 の枠を数個ヒットポイント法を用い各部位ごとに MF の長さを測定する。細胞質単位面積における MF の占める面積を求めデータとした。各データは核の管腔側、核の基底膜側、細胞間結合部およびその他の細胞質の4群に分けて統計処理した。

MF の分布密度は SE 側では、核の管腔側 $12.2 \pm 2.5\%$ 、核の基底膜側 $5.8 \pm 2.1\%$ 、細胞間結合部 $2.0 \pm 1.0\%$ 、細胞質 $11.5 \pm 2.1\%$ であり、OE 側では、核の管腔側 $13.5 \pm 4.7\%$ 、核の基底膜側 $3.9 \pm 1.8\%$ 、細胞間結合部 $0.4 \pm 0.8\%$ 、細胞質 $5.4 \pm 1.7\%$ であつた。これらを t 検定（危険率1%）すると、SE 側も OE 側ともに部位群に有意差が認められ、また SE 側と OE 側を部位群別に比較すると核の管腔側、核の基底膜側および細胞間結合部で有意差はないが、細胞質では有意差があつた。透過性が高い SE 側内皮細胞の細胞質で MF 密度が高く、透過性が低い OE 側内皮細胞で MF 密度が低いのは興味深い結果である。

今後は、内皮細胞の透過性と細胞骨格の関連性を調べ